

Y W C A は魅力的なところ

遠藤久江 (公益財団法人愛恵福祉支援財団理事長)

ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、 虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまもっています、イエスの命がこの体に現れるために。

(コリントの信徒への手紙二 4 章 7 節～10 節)

東京 Y W C A は 100 年以上もの長い間、女性のキリスト者の優れたリーダーシップによって社会活動を展開してきた集団です。女性に対する教育もその一つです。私は 1969 年に、当時の「東京 Y W C A 学院」に社会福祉科を開設する時、東京 Y W C A のスタッフになりました。3 年後大学院に戻り、その後は大学で社会福祉の担い手の育成にあたっていました。2007 年に再び東京 Y W C A 専門学校の校長に招聘を受け東京 Y W C A のお仲間になりました。

38 年ぶりに戻ってきましたが、思いもかけない役割がありました。専門学校の存廃に関わる仕事を担うことになったのです。ちょうど、民法改正により、東京 Y W C A が公益財団法人として生まれ変わらなければならない時でした。この時期、私は「東京 Y W C A 専門学校」校長として、また理事として、その他さまざまな運営管理の役割を担っておりましたが、この大きな変化の渦中にあり、いくつかのことに気づきました。

その一つは、東京 Y W C A の存在意義についてでした。私の印象として、Y W C A は会員の合意を得るまでは時間をかけて歩む集団でしたが、このやり方は変わっていませんでした。今も東京 Y W C A の組織、運営は今日の社会の効率的でスピード感のある動きとは異なっていました。私はこのような環境で 80 余年の歴史のある学校の存廃を考えなければなりません。そこでの気づきでしたが、神様はこの集団に、こうして 100 年以上もの間、多くの困難を乗り越える知恵と、勇気を与え、導いて下さったのではないかと感じたのです。そして、ここに関わる者

同士が互いに励まし合って、歴史を紡いでいると思ったのです。人に出会い、課題に出会い、神様に出会っていると思ったのです。神様のなさることは計り知れないと思いました。このような気づきがありましたので、きっと必要なことは成し遂げられると思いました。その結果、皆様に支えられて、専門学校の開校の仕事も進められたと思っています。

もう一つの気づきは、相反する考えや行動の中に真実を見出す努力が必要だと気づきました。創設期の Y W C A は日本社会に新しい価値観を示したと思いますが、活動するには多くの軋轢あつれきがあったでしょうし、第二次世界大戦時ではキリスト者の集団として禍根を残しました。私が最初に関わった頃、会館は若い女性の華やぎではち切れそうでした。しかし、時代が進むにつれて会館に集う人々も落ち着きと知性に満ちてはおりますが、時代を動かすエネルギーに満ちているとは思われません。

今日の Y W C A の理念や価値や実践、そして歴史には誇るべきものはたくさんありますが、今世界の主流は争い、格差、差別などをつくり出す社会です。Y W C A はこれらとは対立するような世界を創ろうと苦悩していると思います。Y W C A はいつも弱いものを大切に、平和の実現を希求する団体です。一見社会に遅れているような、小さな群れの不器用な歩みの中に、次の時代を拓く芽があるのではないかと思うのです。今私たちは閉塞感や無力感や諦観を抱えているかもしれませんが、次の時代に残さなければならぬものは何かを感じとる感受性と、未来を描ける想像力をいかに自分の中に育てられるか問われていると思います。

私はこのような生き方をいつも聖書の中に見出しています。聖書は人間の中に起こる争いも、和解も、喜びも、悲しみもあらゆることを予測して語りかけてくれます。私は日々礼拝で養われ、主にある兄弟姉妹の交わりで豊かにされています。

Y W C A の歩みもどんな小さな群れであっても主の名の下で、誠実に、謙虚に、いと小さきものと共に歩むことによって神様に祝福され、次の時代に引き継がれていくと思います。